

すずむし

Vol. 2, No. 5

1952年5月

倉敷昆虫同好会

鳥取県下に於ける *Zizina otis sylvia* の記録 西村 公夫

本種は中口5県共に記録されているが一般に山陰地方は非常に局所的であつて且つ個体も求めて多くない。5県共に記録されたのは極めて最近であり、ことに山陰は数年来から一部に記録されている。特に近年鳥取県下に於いて一応まとめたので本報告の形を覽えたいと思ふ。最初1945年頃岡垣弘氏に依り発見されて以来次の8ヶ所を発見された何れも垂直分布から考へて意外な発見であつた。

これはその記録を確實なものだけ発見順に記すと。

※1. 東伯郡矢野村岡垣神社天神川堤

2. 日野郡石見村中石見

3. 日野郡日光村金屋谷

※4. 東伯郡上井町天神川堤(下流)

※5. 鳥取市新茶屋面品治大正村4代米村今代川堤

八代橋今代橋向

6. 気高郡千代水村大正村野坂川堤

7. 岩美郡面影村新袋川堤面影橋附近

8. 鳥取市立川町5丁目鳥取東高校普通科グラウンド堤谷 正徳

最初発見者

岡垣 弘 1945

岡垣弘 竹内亮 1946

西村 公夫 1950.11.22

伊藤 結英 1951.7.

中井 衛 1951.8.19

中井 衛 1951.8.22

山本 義彰 1951.8

堤谷 正徳 1951.9

以上の8ヶ所であるが其の他面伯郡大山村赤松附近其の他に県外の者には未だ記録されておらず何れも確實でない。以上8ヶ所は今まで一度も発見せられていないのに新見里ムシペンなどに驚々と本県に記録されているのが極向の種、これは京阪神の都市部製造業者の仕業であるから。

尚山陰地方の東限及び北限は現在鳥取市であるが兵庫県朝来郡生野町藤ヶ棚牧場と本種1年を武田博元氏に依り1951年9月6日に得られているがこれは街道の真中であり入筆者の手下にあるため毎年数回の探査にもかかわらず発見出来なかったもので恐らく何物かに依り少少入里体が運ばれたものと考へられる。垂直分布から言へば先づ先づ分布するとは信ぜられぬ。

※のものは個体数10個以上得られているものを加入その個体数少ないものを示す。

Literature: Date.

磐瀬太郎: シルサ; アシジコの未記録県 新昆虫 Vol.4, No.2, 1951 P.36

中村正彦, 小林洋: 東風に於けるシルサ; アシジコの記録 新昆虫 Vol.3, No.10 P.20

で谷向では岩の間を水がチューロチューロと弱い音を發して流れていく。そこでは一トノ木に
 多くはいたが取る事が出来なかった。このトノ木はこの谷水の行先に池があるからここを
 やつて来たのであろうが、ふとするとこの小さな谷向の溜り水に笑生したのと同じく考え
 られる。そして降りた所では新種なユツバメ (*Satsuma ferea* Butler) を2個体と
 水は喜多川と云われるウラギンシジミ (*Curatis fulvis japonica* Fruhstorfer) 早く
 同所にて取る事が出来た。そして予定より小黒田へ降りる事が出来た。午の頃よりと婦
 麗なルリシジミ、ヘニシジミの中を通りぬけ小黒田より黒田へ行く道を並り始めた。そ
 の道は両脇にはムラサキシジミが最も多く、時にはサタハ、アサギテハ、ルリサタハ、テ
 ンケウ等が現われ、この道で木陰はなつた涼し。所々に蕎麦屋やせせうと休んで元氣
 を回復して再び並り始めた。やうやくこの頂上には未だ時分迄来た後を眺めるかう海津の
 土手に注目した。日曜日でもあり天気は上々で先ほど小川の汽笛の音とヒビに夜見客がどつ
 と押寄せたらしい。やいとと事を考えながらも皆々目的地へ向って降りかけていた。こ
 のあたりも本ごろのくぬぎの木も多く黒田へ降るのも一途近いようだった。丁度この道で黒
 田からこの道とある所で水を飲んでいたら「ミヤマコビトリ」 (*Thamias montanus* Bre-
 mer) と採集した。それから道をはずれて畑のあぜがたりに降りて行った。このあたりから
 少し風が出ていたが今迄述べた地名の内サタハ、モンシロチョウ、ルリシジミ、ベニ
 シジミ、キチウ等は幼虫が最も旺盛である。やがて民家へ入った。そのほとりにはくぬ
 ぎ、松を切り出してゐる所でマツキホシゾウムシ (*Pissodes nubilus prolophi*) と
 青野矢によつて採集された後輩者も死んでゐるのを一羽体採集出来、結局2個体である。又少
 し歩いて、またして、くぬぎ、松、杉などが取り出されている。そこでは数分昆虫採集に中
 断がさかんで死んでゐるのでそのあたりでうろたへたり待つてその間取れたものの中には
 いてかなり深山とそれの内山名の判明するものだけで「ヒメスズカミキリ」 成虫、ハナゴロカ
 ヲ (*Hermestes vulpinus* Fabricius), ヲハハムシ (*Phyllobrotica armata* Balg), カナギハムシ (*Melasma virgineipunctata* Scapoli) と
 けり等それ以前に採集したマツキホシゾウムシも同所にて取ったのである。そして深山の採集
 物は満足しなからう、帰り道に山にいてある虫の集合場所即ちこれから望みのある
 馬ふんさうかいなから帰りかけていると同行した本屋員の尾崎君がネットかつたカメノ
 コテントウを取ったと云つてとても嬉しそうを顔してこちらをやつて来た。そして暫くを熱心
 すると共に彼らの活躍がりは非常に嬉しかった。それにカメノコテントウを
 見つけようとしたがけが聞く所によれば今は分極的のなうと取る事が出来なかった。この
 様にして今日一日は先ほどころの嬉しさだけでなく大変愉快で有意義な日だった。なを前夜の
 モノサライトノ木は越冬中には存したのでオオネイトノ木種ではないかと思われるので
 確定は判明した後改めて報告する。

次号は「おとしぶみ」特集号
 の予定多数投稿して下さい。
 応募氏の所記 (編集部)

バックナンバー分類		Vol. 2, No. 1, 15-	
すずむし	〒	" No. 2, 15-	"
Vol. 1, No. 6 10,-	8,-	● No. 3 15,-	"
" No. 10 15,-	"	Vol. 1 No. 7 の別冊	"
" No. 11 15,-	"	「観音山の昆虫」	"
		10,-	"





ヤサイゾウムシ

金盞花を害す

ヤサイゾウムシ *Lutroderes costirostris* var. *obliquus* Klug. は昭和17年最初岡山県で採種用入冬に顯著な被害を与えて以来、現在では東京、千葉以南の両南日本に広く分布し「鳥も通はぬ……」とうたわれた八丈島でも蔬菜類に可成りの被害を生じるようになった。その食性は極めて雑食性であって米口 *m.m. High* 氏(1939)の発表によれば一般蔬菜以外に16科40種の野外植物を喰べる由である。昭和26年に於ては、岡山大学農学部構内で作物の被害が甚しくなったのは月頃からで、同月下旬温床において白菜幼苗が本幼虫の喰害をうけたが、ついで4月22日花弁園芸学研究室の花壇に植えてあるキンセンカ *Calendula officinalis* L. の花蕾或は芽の部分に多数の幼虫が喰込んでいるのを同放室安田勲教授の教示により知った。その後本校附近及郊外に栽培されているキンセンカを調べてみると同花壇の幼植物に被害が甚しい傾向がある。品種間による被害の輕重は在来種より八重咲の米口種の方が大であるようである。尚今岡の調査で岡山近郊のキンセンカはヤサイゾウムシの被害と共にトリバカ科幼虫

Pteronotridae による害も相当ひどいことを示した。

この後筆者はヤサイゾウムシ幼虫の食餌植物について飼育試験をしたところ、昭和26年度へお終つては11科28種の植物にわたっており、異イ強いのはキリ科7種、十字科6種である。尤も、食餌植物の種類はただけに限らずまだ増加するのではないかと考へる。(岡山大学農学部畜虫学研究室 安田安室)

ヤサイゾウムシ

の飛翔について

ヤサイゾウムシの飛翔についての海外での觀察は非常に稀である。

我りては勿論いままでに2回觀察する報告はなかつたのであるが安江氏(昭和26年8月2日の午後9時同氏の電燈に誘れて飛来したと思ふ成虫を1匹捕へた。その後筆者は同年10月17日午後1時(14時晴、24.6°C)本学部構内庭取コートで丁度雨をまた曇出てラケットで叩き落して見るとまぎれくさハヤサイゾウムシであつた。それ以後赤松市の田中亮三氏から安江氏へ便りによつてやはり同地方に於て飛翔を實驗室内で觀察された。

これらの事實は年々被害地を拡大してゐる今日その傳播要因の1つとして成虫の飛翔が確認されたことは植物防滅上重要な意義を有するのである。又我りてのヤサイゾウムシ発見地岡山で最初確認されたことは誠に有意味だと思ふ。

(岡山大学農学部 河田和雄)



原稿の効は毎月5日

原稿はなるべく原稿用紙に楷書で

明確に記述(ます) (編集部)

蝶の訪花一題

蝶の訪花に関して新村太郎著の生活に詳しく、各種について、どんな花に飛つたかという現在の記録をまとめておいてある。

筆者は本年4月18日、岡大理学部で生理学実験室で、*Anthocaris scolymus* BUTLER ツスキチョウ令が、*Jarax-acum platycarpum* DAHLST.、タンポポに訪花中を青野孝昭氏と共に確認した。吸蜜していたお香かのほどは、傘が接近する間に飛び立ったので明確ではなけれが、おなり近くから観察出来た静止する形や動作の状態、盛んに動かしていた口吻などから推してほとんどこのことも確実と思われた。ともかく上記記録中には見当らないので報告しておく。

※ ツスキチョウに似てはゲンヤ、ダイコン、タネツケバサ、アヲナが記録されている。(小野 洋)

キマダラヒカゲの訪花資料

ジノノチョウ科の或種は訪花の習性を持つ。しかし認められにくい。本種、訪花についての観察はあまり聞かない。林慶二郎(1951) 日本蝶類解説 p.54 に本種は花に飛来しないと明記されているので、これは小野洋、青野孝昭両氏の観察された一例を報告したい。

日時 25/IV - 1947

場所 都座郡三須村

本種少数がツツジ(種名花色不詳)に訪花するのを観察。終に本資料を提供された小野、青野両氏に厚く御礼申し上げる

(店瀬 義明)

アゲハチョウの初見資料

倉敷地方の本種の初見の記録が、たので甚だ不完全ではあるがここに一資料として記録しておく。なお初見の記録が見えない年もあるのは、鑑定の御諒承を乞う。

年次	初見月日	場所	発見者
1947	13/IV	清音村小黒田	青野、小野
1948	31/III	〃	青野
1950	9/IV	船越町柳井原	店瀬、
1951	24/III	倉敷市通津	店瀬、阿部、
1952	26/III	岡山市津島	小野

これで見ると本種の春季出現は大体3月下旬であろうと思う。大後美保、鈴木雄次(1947)：日本生物季節論に示されている日本各地のアゲハチョウの出現日の図によると当地方は大体 20/IV の線にあたる様である。上記の記録から見れば少しおそい様であるが、現在迄の筆者の初見からみて、本種の標準初見日(筆者はこれをその種が越冬の場を離れて大抵毎日出現し始める月と定めた)は 10/IV 乃至 17/IV 前後である、未だ完全な調査が出来ていないのが現状なので今後の調査を期待したい。未嘗ながら資料を多数とせられた小野、青野孝昭両氏に感謝の意を表する。

なお、倉敷地方といつても、たしかに近一帯を示し岡山市、あるいは倉敷市と比べて初見の地域差はないのかもしれないと思ふ。又、1947 - 1950 年の記録は観察者及資料が非常に少ない、たかことを明記しておく。(店瀬 義明)

コンボウアメバチについて

本種 *Acanthostoma insidia* Smith はワスサン、ヤママユ等の幼虫に寄生する大形種である。

筆者は 1952. 3. 2. 倉敷市津原でワママ

3 房によつて黒田で1計4個体採集した。どれも口は開いてなく、中の蛹がヤマトコエの重さがあった。しかしその時



これに本種が寄生して、
ようとはしず、
箱の中に安置した。そ
して来る4月1日自宅にア
昆虫談話会の時、水野君と
蛹を飼った所、中に全長3
× $\frac{2}{3}$ 0mm 位の本種幼虫一匹が
きちきちに入っていたので、おしくも体剥
き出して、その後10日して他の3
個も見たH1最中蛹化したの新鮮なもので
した。そして4月26日には蛹を体がヤ
マトコエの体長に近づいて、その内蛹は
早やかつたらしい黒田で採れたのが、おそ
も10日後にドリードして4月28日成虫と
なつたのです。成虫は寄生蛹を思入は
ど大きく、全長、4cm 翅長3cm 後腹
3.5cm でした。(近藤 光宏)

天敵 2 題

1) 1950年6月のこと清吉村黒田に
てラミーカミキリがヤマトコエの葉上でオオ
イシアブ?に捕えられていたのを採集した

2) 1951年8月のこと倉敷市田之上
にて樹上に飛来していたルリタテハがカマ
キリ1種不明に捕食されていたのを筆者第
一が観察した。樹液を吸中になつてゐる蝶が
これら捕食性昆虫に捕えられ、捕食は度々
あるものと思う。

なお上記2つへ観察は残念ながら正確な日
付を失した。(玄環 義明)

倉敷附近に於ける

メスアカバエ 大発生

本種 *Bibio japonica* Motschulsky
は春早著しく増えるもので早は赤黄色、
合は黒色光沢がある。倉敷附近に於てはだ
いた4月中旬頃先ず黒田附近から発生し
4月下旬以後5月初にかけて近郊にもむく
むくとその数を増すのである。そして本種
早は合に比して極めて少なく50個体以内
1、2個体が50個体より多く、合は合の
の集合性を有するのである。

筆者は倉敷市老松町、老町高校裏側の水
溜池にて、ほなほだしく集合してゐるのを
見たのでここに報告する、それは湿度が高
い4月26日、晴の日の午後同所にて本種

“すずむし”感想 西村公夫

入会して日少くよくわからないうのですが、23巻を巡ってみたいと思います。
第一、観望山の昆虫ですが、いろいろと思ひますが、第一、観望山に未報告の科目をも次
々とつづけられるとよいと思ひます。第二に白羽昭君が笑ったのは残念ですが、何れにし
ても今度出されるという年刊誌は大変有益だと思ひます。是非、研究物の良き発表
場としていていただけるように編集者の方、或は同好者諸氏にお預けするとうに発行の日
を期待して居ります。第三に出来れば全編印刷には要インキを使用されず、もっとも、そ
れをものが出来るのではなかつたと思ひます。第四に、そのと比較するとやはり黒インキの方が読
みやすい様に思ひます。第五に、投稿者、著者名に隠れている事です。しかし、社会と比較
してみるとやはり本会の禁んでは優れて居る様です。以上簡単に「すずむし」Vol.2, No.1
までの私の感想と述べてみました。



が実にすごく集着してゐるのを見、筆者もこれには驚かされた次第で、附近の針田の草一本あたり10個体はいただろう、特に枯れヨモギなどには本種が黒太い輪になってゐた。なる本種と採りにミスカタトンボとヒトスジササヘが多数混在して、盛んにチャッチャしてゐたが、向題にやうな状態では(近藤 光宏)

スズメガの分布と資料

1. オスミモリスズメ *Langia generoides nawai* ROTHSCILD et JORDAN

真庭郡湯原町湯本にて、1949年4月24日早朝、外郎附近で1頭採集

2. スミバネウジャク *Haemorrhagia radians* WALKER

真庭郡湯山町坤にて、1951年7月27日正午頃、新花中の1頭を採集。(青野 孝昭)



Polistes jokohamae RADOSZHOWSKI と ミミムシ の野外観察

2月4, 2月倉敷市瀬津水源地附近の森からこの垣にて本種(蜂)がカミの葉上を目的有りとはかり盛んに歩きまわっている所を筆者目撃、しばらく観察した所、先づ本種は一個体の全長10mm位いのミミムシを発見し、たぐちにそのミミムシのミミを噛み始めた。1分向ケラミの頭部あたりと一心に噛みだりヌチヌチと前肢をさし、腹正中腹腹腹で、しっかと、ふんばっていた。この状態はアリが獲物を咀嚼する時に見られる様子をこうとした。ミミムシがミミは鋭い歯にてミミを噛み砕く様子はなかつた。そして蜂はこの様な状態を1分置きに3回くらい繰り返したあげくどうしようもないと云つた様でミミの辺をうろちょろしてゐたが、ついにその後ミミを手に取って見たが腹部に多少の咬み跡がみえていたのみで、ミミムシには別に変わった事はなかつた。以上が同種1か観察出来たが、この事から、この他種々の切虫にとつては蜂と云ふ最悪敵は蜂御されてゐるがミミムシはいかに保護されているかが伺われる。(近藤 光宏)

★ 虫蝶の採集と研究 (4) ★

クロタイマイの飼育観察 (19)

8月4日～11日

この間僕が京都へ採集に行ったので様子は分らないが、二匹は脱走したものだと思ふ。

8月11日

京都から帰って見ると、幼虫は一寸ほどの青い虫になって、ホリホリと音をたてながら樟の葉を食、ていた。葉の大きさは、自分が餌であつた時の大きさより大きい。胸部には黄色の横帯が通り、その横帯の上には、目かと思ふほど目とよく似た斑が両端に一つづつある。

8月12日

飼育——昨日まであつた胸部の黄色の横帯が消失、緑色の体は、ますます緑色を感

8(42)

いがある。胸部は糸や葉巻にしっかりとくっついてる。いっとして解かない。

8月13日

卵——朝見ると、尾の先に尻尾、たけがらをぶらさずと頭となっていた。幼虫時代、これほどナミアゲハと似ていたこの蛹も、蛹となった時は一見して区別出来る程、ナミアゲハとは似た所がうい。またナミアゲハの蛹は頭部のフコが前方に出てゐるのに反して、この蛹のは上に向いてゐる。その上、前種の蛹のフコは二本であるが、この蛹は一本しかもってない。指でさわるとゴリゴリと硬さ左右は動かぬ。

8月24日

羽化——朝見ると、うまい緑色をした蛹が尻に黄色と成っている。胸部の横は青い葉々に見えるのは翅の模様だ。午前になって見ると、とてもおどろかせる色をした蝶が羽化してゐた。雄である。

以上、大変大げさな観察に終つてしまつた。特に羽化、脱皮、蛹化、羽化等の重要な観察が出来なかつたのは残念である。そしてナミアゲハ、クロアゲハ等と一緒に比較観察すれば一層面白い結果が生れるであらう。この飼育で、クロタスマイの卵から成虫になるまでの期間は大体1ヶ月で卵の期間が3日、幼虫の期間が18日、蛹の期間が11日であることがわかる。しかしこれはどんな場合にもあてはまる日数ではないらしい。と云うのは昨年12月、クロアゲハの終年幼虫で取つて来て蛹になるのを観察した時、その前蛹体は三日であつたがクロタスマイの前蛹体は一日だけであつたからである。どうしてこんな差が生じたのだろうか、種類が違ふためか？季節や気温等によるものだろうか？等の問題がそれから生じた。今年はそんなことを研究してみようと思つてゐる。(つづく)

虫の初見調査に就いて

本件に就きましては先月号に巻頭の御協力方を要致致しましたが現在続々と報告が入つて居ります。今より考えておればもっと研究して、いふべきところが多いと思ふ方が多くありますが本年は現状で行い来年から詳細なる調査を行いたいと希望してゐます。今後多く報告される様重々諸兄の御協力を期待します。(Y.H.)

編集後記



蝶の四月も過ぎて暗々蒼々と感ずる様な日もある頃となりました。

四月以来原稿締めにあつておぼろしく思ひ込めて来ましたが、五月が過ぎると毎日の絶好の季節の日々になり皆さんの動きもますます活発になることでしょう。

尚紙面の肉付け上乗せせられたい方があるのではと入方は此方へお書き下さるから御承下さい。(R.T.)

す す む し 第2巻第5号

昭和27年5月10日 印刷

昭和27年5月10日 発行

編集者 友野 良一

印刷者 全

発行所 倉敷市新川町

倉敷市小学校理科教室内

倉敷昆虫同好会